



大阪市立大学  
工学部同窓会

# 同窓会だより

1993年11月末日  
大阪市立大学工学部同窓会  
〒558 大阪市住吉区杉本3丁目  
3-138 TEL 06(605) 2789  
FAX 06(605) 2769  
発行人 下田 隆二



ご あ い さ つ

同窓会会長 下田 隆二

バブルの崩壊、政治家・ゼネコンの贈収賄、談合問題、急激な円高等で世の中が政界・財界を中心に揺れ動き、同窓会会員の皆様にもいろいろと影響を及ぼしていることと思いますが、いかがお過ごしでしょうか。

工学部同窓会の会長を仰せつかってから、学内外の色々な会合や催しにお誘いをいただき、できるかぎり出席させて頂きました。私達の年代の在学中は杉本町のキャンパスはアメリカ進駐軍に接收されており、当時の理工学部は北区扇町にありましたので、在学中杉本町へ行ったことは一度もありませんし卒業後もほとんど行ったことはありませんので、43年間のご無沙汰であります。

同窓会会員の皆様も、期間の長短はあっても一部の方を除くと、卒業後のご無沙汰については似たようなことかと想像致します。私の場合はこの数か月間に何度も行って諸先生方にもお目にかかり、多くの面で今昔の差を目の当りに見る機会があったわけです。そこで感じましたことを書かせていただいてご挨拶に代えたいと思います。

上に述べました通り、現在のキャンパスは昔とは別の場所で、敷地も広く学舎も立派で昔とはまったく比べものになりません。私達の頃の先生方は当然のことながらリタイヤなさっています。ですから私達が学んだ頃と今とでは、別の大学といってもよい程異なっております。しかし入ってみますと、ほかの大学へ行ったときに感じるような「よその家に入ったような」違和感がありません。「MITになり損ねた大阪市立大学理工学部」と週刊誌に冷やかされたことがありますが、扇町のオンボロ学舎のなかに充満していた熱気はいまに引き継がれ、当時の諸先生が創り出された研究姿勢への伝統が生き、そしてそのような雰囲気は琴線に共鳴するのでしょうか。

同窓会会則第2条には「本会は会員相互の親睦をはかり、大阪市立大学の発展に資することを目的とする」と謳われています。各学年ごとのクラス会や職域・地域ごとの会合や活動は活発に行われていることと思いますが年度にまたがる親睦会は、人見先生他のご尽力にもかかわらずアクティブとは言い難いようであります。同窓会8000人の会員の有機的なつながりは、会員一人ひとりの財産であり、これを活性化することは「大阪市立大学の発展に資すること」にもつながることになると思います。

同窓会とは関係ありませんが、大阪駅前第三ビルに市大文化交流センターがあるのをご存じでしょうか。生涯学習の要望に応え開かれた大学として、錚々たる講師陣で公開講座が定期的開催されています。皆様の参加をお勧めします。

末筆ながら、会員皆様のご発展とご健勝をお祈り致します。

(機械・昭和29年卒(株)酒井鉄工所常務取締役技術本部長)

## 工学部の現況

### 名誉会長 木下 雅悦



昨年来教職員スタッフの充実に努めて参りましたが、毎年数人の先生方をご定年でお送りするなか、まず、教授ポストの殆どが充足致しました。今後は助教授層等のいっそうの充実をはかり、より高度の教育・研究をめざす所存であります。

前事務長の定年退職に伴い、今年の4月から黒河内東洋明事務長が着任されました。また、長年お世話になりました庶務係の石田さんと教務係の吉本さんが、それぞれ2部の経済・商学部担当と学生部に転出され、後任として教務係に石田榮子さんが着任されました。

第9番目の学科として材料開発工学科、第10番目の学科として都市工学科の新設を計画していますが、平成5年度以降は学部の学生定員増が認められなくなりましたので、新しい展開を試みています。大学院の情報工学専攻および生物応用化学専攻の新設は、教員組織、カリキュラムなどの概要もできあがりしました。ところが、ここに至り基礎となる学部の学科の在学生数がかかなり多いという難問に直面していますが、早期開設をめざし、ひきつづき努力して行く所存であります。大学全体としての大学院の整備、充実もいそがれ、理系では理、工、医、生科の4学部合同で新しい理系大学院構想の検討が始まりました。

大学後援会の研究部が発足しました。これは全学の研究および教育を支援するためのものでありますが、工学部の諸先輩のご尽力によってつくられ、10年以上もの長期間育まれてきた組織が基盤となっています。今後とも先輩諸兄のご支援をお願い申し上げます。

異例のことではありますが今年度の補正予算で、まずC棟の改修を認めていただきました。雨漏り、鉄の窓枠の錆び付き、それに側壁の崩落の心配から解放されます。その他、大型機器類の設置、および研究室、トイレの改修等、日ごとに新しくなりつつあります。

長引く不景気の中で卒業・修了見込みの学生諸君は落ち着かない日を送って来ました。元来、本学は規模のわりには学生数が少なく、反面、層の厚い先輩に支えられて、きわめてスムーズに就職活動を続けて参りました。しかし、今回はなかなか見通しが立たないようであります。先輩諸兄のかわらぬお導きと一層のご高配をお願い申し上げます。(工学部長・生物応用化学学科教授)

## 機械工学科の近況

### 守田 栄之



雨の多い不順な夏でしたが同窓会の皆様にはお元気でご活躍のこと、お喜び申し上げます。

さて、大学も本年度から週5日制になりました。また来年度からは大学設置基準の大綱化で教養課程が無くなり、いわゆる縦割りに

なりますがこれに伴うカリキュラムの変更が現在進行中で来年度から講義は相当変わります。なお前号で少し触られていました材料関係の、いわゆる第9学科新設は当初平成6年開学を目指し、本学科にも大きな影響を及ぼす予定でしたが様々な理由で多少遅れるようです。

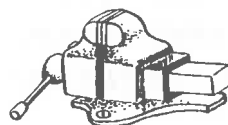
次に人事関係ですが機械設計工学及び繊維機械講座の上田祐男教授が3月末で定年退職され名誉教授になられ、その後任に南齋征夫助教授が教授昇任されました。また流体工学講座の加藤健司講師が助教授に、材料力学講座の逢坂勝彦助手が講師に、熱工学及び化学機械講座の西村伸也助手が講師に夫々4月1日付で昇任されました。さらに流体工学講座で大学院前期博士課程を修了したばかりの脇本辰郎君が4月1日付で助手に採用され機械工学科も若返りました。

誠に悲しいことに東野一郎名誉教授が4月17日心不全で急逝されました。先生は生前にもボーイスカウト運動等への貢献で藍綬褒章等を授与されていましたが、この度、学術貢献に対し正四位勲3等旭日中章を授与されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

ところで来年3月卒業、修了予定者の進路決定状況をお知らせしますと本年度はたまたま4回生が63名、大学院前期博士課程(修士)2回生が24名(内、外国人留学生9名)と在籍者が非常に多く、加えて御承知の通りの景気の悪さで余り良くありません。この便りを書いている時点でもまだ未決定者が多少有る状況です。

彼らには厳しい試練ですが長い人生の荒波の一つと思って立ち向って欲しいと願って居ります。

最後になりましたが同窓生の皆様の御活躍、御多幸をお祈り致しますと共に本学科への一層の御支援をお願い申し上げます。(機械工学科主任教授)



## 電気工学科の近況

藤井 知生



皆様にはご健勝のこととお慶び申し上げます。

例年通り夏休みがあって、恒例のゼミ旅行で海辺にも出かけました。にもかゝらず、何とも充実感に乏しい夏でした。冷夏と不況のせいでしょうか。そして、いつの間にか银杏祭の立看板が並び始める季節となりました。卒業生の皆様にはご健勝のこととお慶び申し上げます。

電気工学科の近況をお知らせします。今春、鈴木裕先生が電気回路学講座の教授に昇任し、青笹教授、松下教授ともども、戦後以来の大学教育改革と巷間云われております教養教育改革、ならびにこれに伴うカリキュラム改定に心血を注いでいます。また、草間稔、中川吉郎および南繁行先生はそれぞれ講師に昇任し、各専門分野で、個性豊かな講義を開講しています。新しく、電気計測工学講座に田中健司助手が就任しました。平成5年3月に早稲田大学大学院理工学研究科物理学および応用物理学専攻博士課程を退学、力学系のカオスの長時間相関について研究中の俊英です。趣味は読書と美術館、博物館巡りと伺っています。なお、志水教授は大阪市立大学計算センター所長として新規導入の計算機各種の選定、キャンパスLANの策定等に奮闘中です。

堤四郎、三谷七郎両先生には、3月末日で定年退職されました。堤先生は、今年一年を充電期間として、来春から福山大学で私学教育に献身される予定です。三谷先生は、びわ湖サイクルマラソン協会々長、関西岩見沢(北海道)会の会長としてお元気に活躍されています。

本会報発刊の時期には、すでに新聞誌上叙勲者名簿等でご確認いただいているかと拝察しますが、奥田滋先生には、勲三等旭日中綬章を授けられる運びになりました。

今年は例年になく卒業予定者が多く、学部60名(内才色兼備の女子学生4名)、修士24名(内マレーシャ1名、中国4名)です。幸、これらの諸君は優秀な人材が多いのですが、折からの不景気で推薦書を何回か増刷するという悲哀と屈辱も体験しました。ともあれ、企業社会における卒業生の皆様方の実力と実績を背景にしたご尽力、ご助力によりまして、9月中旬過、大学院入試結果が出た時点でほぼ全員の進路が決まりました。紙面をかりまして厚く御礼申し上げます。

ご紹介しましたように、学生を含む学科構成員も年とともに変わります。研究、求人にも何かこつてせいぜい杉本町にもお運び下さい。母校は卒業生とともに栄えりと申します。一層のご活躍と発展をお祈り致します。

(電気工学科主任教授)

## 応用化学科の近況

青木 修三



同窓会会員の皆様には益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて応用化学科の近況ですが、本年度は教員の異動はありませんでしたが、有機工業化学講座の塚清孝助手と高分子化学講座の松

本章一助手のお二人が、ともに4月1日付で講師に昇任されています。また本年度末には小郷良明教授が定年を迎えられ、昭和39年に着任されて以来30年にわたる市大生活を終えられる予定となっております。

いま、日本全体を覆っている不況の嵐は、本学科卒業予定者の就職にも容赦なく吹き付けてきております。やはり新聞等でいわれておるように、女子学生を可とする求人は僅かであり、公式・非公式に男子に限ると表明しておられる企業が多数を占めておりました。また学部生と修士を比較したとき、今年はぜひ修士を採用したいとされる企業の方も多く来訪されました。その修士においてすら、昨年迄とはまったく様変わり、買手市場に変貌しました。それでも修士はなんとか全員内定を得ることができましたが、学部生はなお未定者を残しております。このような状態がいつまで続くか予測はできませんが、教員・学生ともに今迄の安易な気持ち捨て、より真剣に就職、さらには社会に出てから何が出来たか、何をなすべきか、を見つめ直すチャンスが到来したものととらえたいと考えております。先輩諸兄姉の一層のご指導、ご支援をお願いいたしたく存じます。

学部卒業予定者にとりまして、この就職難に加えてもう一つ大学院入試の狭き門があり、ダブルパンチとなりました。今年は昨年以上に進学希望者が多かったのですが、さらに明年3月には生物応用化学科の第一回卒業生が誕生します。去る9月に行なわれた大学院入試は、過渡的に2学科をあわせて応用化学専攻として実施されたため、一段と厳しい競争となりました。

7月から完全週休2日制が実施され、土曜日の講義はなくなりましたが、研究室はなお従来と同じように活動を続けております。明年度からさらにカリキュラムの改革が予定されております。

末筆ですが皆々様の一層のご健勝とご発展を心より祈念いたします。(応用化学科主任教授)

## 建築学科の近況

川村 純夫



教員に関しましては、建築構造学講座に藤本助手が講師に昇任、大学院工学研究科博士課程修了の谷口与志也君が学位取得のうえ助手に採用されました。また建築環境工学講座に西岡利晃助教授が、大林組の研究所から着任されました。

都市計画講座に土井幸平氏が教授として10月1日着任いたしました。さらにながい間の懸案でありました技術職員の中井重行君がグループ主任に昇任になりました。

これで教室の教職員の充実も一応日途がつき、教育・研究に励んでいるところであります。しかしながら大学にとって大きな変革、教育体制の根本的改革のため四年生一貫教育としてのカリキュラムの作成に、多胡先生、坂先生を中心に鋭意検討を行っているところであります。

さらには、研究の水準を高めるためにも大学院の充実が急務を要するところであります。新制大学発足時より博士課程をもつ伝統ある教室ではありますが、社会の変革、工学の展開また地域社会の要請に応える意味からも大学院の人的及び物的両方面の充実が肝要であります。

建築学専攻は現在5分野ですが、教室の努力と関係方面の御支援と御理解を得て志望分野の増設と研究施設等のより一層の整備に努めているところであります。

また建築の教室の属している工学部C棟も老朽化がめだっていましたが、今年度下半期に大改修の予算がつき工事にかかることになりました。

さらに教員の研究活動も盛んで、建築構造の三先生とメンブレイン（太陽）の南助教授が英国で開かれた国際シエル立体構造学会に研究発表を行ってまいりました。

なお、今年は社会事情を反映してか就職状況が苦しい面もありましたが、一二を除いて女子学生を含めてほぼ日途がたつたところで、ほっとしている此の頃です。

しかし最近の社会事情をみますと、来年度はより厳しくなるようにも思われます。求人情報、特に女子学生の就職に関しましては同窓各位のご支援をお願いします。

（建築学科主任教授）

## 土木工学科の近況

山田 優



今年、はじめての学科主任をさせていただいております。会員の皆様にはますますご健勝のことと存じます。毎年、本会や土木会の懇親パーティーなどに参加するようにはしていますが、今年はお互に私のお部屋まで訪ねてきていただく方もあり、多くの方々とお会いすることができました。

皆様のお元気で活躍の様子をお聞きしたり、私どもへ温かい励ましなどをいただき、大変うれしく、また心強く思っている次第です。

しかし、伝わってきますのは残念ながら吉報のみではありませんでした。土木工学科の関係のみについて申し上げますと、4月に内海達雄先生、6月に毛利正光先生、10月に岡部二郎先生、本学科旧教員の3人の先生がご逝去されました。さらに卒業生で、36年卒の中山武志氏が8月に、また60年卒の木下光正氏と62年卒の栗須和茂氏が10月に、いずれも若くして亡くなられました。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

さて、教室内の近況をご報告します。まず、学生の入学ですが、今春、学部にて50名、大学院前期に17名、後期に4名が入学しました。最近、土木にも女性が入学するようになりましたが、今年、学部にて4名、大学院にて1名が入学し、過去最高でした。

卒業・就職については、今春、学部から43名が卒業し、うち15名が進学、28名が就職、大学院では10名が修士号を取得し、うち2名が進学、8名が就職しました。就職した計36名のうち、13名が公務員、12名が建設業でした。公務員志望は多くなる傾向にあります。来春の就職希望者は学部、院を合わせて36名で、すべて内定していますが、うち16名が公務員、11名が建設業です。

不況にもかかわらず、今年も多くの人をいただき、ほとんどの学生が希望どおりのところに内定しました。会員諸氏の日頃のご活躍のお陰と思っています。

教職員については、移動はありませんが、3月末に材料・環境工学講座の貫上助手が米国のシンシナティ大学での留学を無事に終えて帰国しています。また、10月に土質工学研究室の東田講師が助教授に昇格しました。

教職員数の不足の上に、教育課程改革、自己評価の制度化、新学科・新専攻開設準備、そして学生部関係等々、学内問題について、委員長や学部代表委員などを引き受け、また相変わらず学協会活動、国際交流も盛んで、真に忙しい毎日ですが、教職員全員、微力ながらも頑張っているつもりです。今後ともよろしくお願い致します。

（土木工学科主任教授）



## 応用物理学科の近況

美馬 宏司



このところ、国の内外を問わず世の中に次々と「変化」が起こっていますが皆様いかがお過ごしでしょうか。本学での最も大きな変化は今年度から学校5日制がスタートしたことででしょうか。最近はやがて真っ暗になる5時限目まで授業をしています。

さて、昨年10月1日、中村勝弘教授が着任された数理工学講座には、今年4月1日に高根美武助手が、また10月1日付けで小川哲生助教授が着任され、全席公募の人事が完成致しました。高根先生は、メゾスコピック系（半導体と常伝導金属）と超伝導体を結合させた複合系における電子のふるまいなどを研究しておられます。応用物理学科の最年少スタッフで、学生の信望も厚く、登山、酒づくり（もちろんお毒味も）などの趣味をもっておられます。小川先生は、「物質の量子状態の生成と制御に積極的に光を用いる」という光物性の新しいテーマの研究などに従事されておられます。学内外の理論家実験家を問わず共同研究に意欲的で、はやくも応用物理学科に新しい風を吹き込みはじめていただいております。量子カオス、非線形動力学、メゾスコピック物理等のフロンティア領域の開拓者のお一人である中村勝弘先生をリーダーに数理工学講座の発展が期待されています。

ところで、今年度の本学科の4年生諸君は例年になく豊作(?)で定員より約10名も多い42名とにぎやかな年になりました。ところが、何というめぐりあわせかこの不況です。この厳しい就職戦線を勝ち抜くために、人見先生に特に協力をお願いして就職の世話を一緒にしていただきました。最大の難問は、バブル時代の就職神話を信じて疑わない学生諸君に就職に対する「意識革命」をってもらうことでした。大学院進学希望者も例年になく大勢になり、定員10名のところへ21名が受験、結局「就職留年者」が増えそうな気配です。もちろん、長い間おつきあいを願ってきた主要電気メーカーからはそれぞれ求人をしていただき、大学院前期博士課程修了予定の諸君はほぼ希望通りの就職が出来ました。各社との長い「おつきあいの歴史」の大切さを改めて知ることにもなりました。

卒業生の皆様には日頃よりお忙しいこととは思いますがぜひ時間をつくっていただき、杉本町へもお立ち寄り下さい。そして、21世紀を担ってくれるはずの後輩諸君ががんばっている姿を見てやってください。彼らを叱咤激励してやって下さい。よろしくお願い致します。

(応用物理学科主任教授)

## 情報工学科の近況

藤原 値賀人



本年、情報工学科では第一期生が4回生となって全カリキュラムが提供されるようになり、ようやく教育体制が全て整いました。

さて、今夏の稀にみる天候不順が象徴しているかのような不況のもと、今年始めて大学院進学と就職

を経験したわけですが、情報工学科には独自の大学院がまだ設置されていないので、本学の大学院への進学希望者は電気工学専攻を受験し6名が合格しました。現在情報工学関連の専攻を新設すべく、部長を始め関係の皆様方に努力をしていただいております。

次に、就職状況ですが、本年は不況であり且つ情報工学科の卒業生がまだ企業に在籍していないので企業とのつながりが弱く心配していました。しかし、約200社から求人をいただき、就職希望者の内1名は現時点ではまだ決定していませんが、他の全員は内定しました。

平成4年3月に定年退職された山下一美名誉教授は、現在関西大学工学部電子工学教室で教授として教鞭をとられていますが、ますますお元気で活躍のご様子です。またそのあと空席となっていました情報システム工学講座の教授には同講座の濱裕光助教授が平成5年4月に昇任されました。これからは若い力でますます教育・研究の充実が励まれることが期待されます。以上のような人事移動がありましたので現在の情報工学科の構成は以下のようになっています。

情報システム工学	教授 濱 裕光 助手 中島 重義
情報処理工学	教授 細川 省一 助教授 岡本 次郎
知識情報工学	教授 奥本 隆昭 助教授 辰巳 昭治 講師 北村 泰彦
情報ネットワーク工学	教授 藤原 値賀人 助教授 岡 育生

以上の構成のもと、情報工学科構成員全員が努力して教育研究の充実をはかる所存ですので、同窓生皆様方のご援助をいただけるようお願い申し上げます。

最後になりましたが皆様のご健勝をお祈り申し上げます。  
(情報工学科主任教授)

## 生物応用化学科の近況

加藤 錠治



今年もさわやかな秋空が広がり、すっかり秋本番となりましたが、同窓会の皆様にはお変わりなくお元気にご活躍のこととお慶び申し上げます。本学科もようやく4年目を迎え、1回生21名、2回生16名、3回生15名、4回生28名と全学年で学生が揃い、学科として充実して参りました。1期生である4回生は、各研究室に配属され卒業研究に励んでおります。

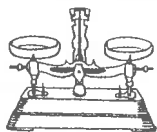
日本列島はバブル経済の崩壊、新内閣の誕生など次々と新しい波が押し寄せていますが、本学にも教養改革、大学院改革、自己点検評価などこれまでにない大きな課題が山積みされています。その中でも本学科にとっては「生物応用化学専攻」の平成6年4月開設が念願の最重要課題であり、木下工学部長を中心として工学部の各学科、特に応用化学科並びに事務室の協力を得て、その準備が進められています。また、教養改革にともない来春から1回生が学科に配属されるため、専門基礎科目である「生化学」などの科目を本学科の教員が1回生から講義するという新しいカリキュラムが精力的につくられています。

景気の回復の目処が立たない長引く不況の中で、今春から本学科初めての就職活動が始まり、大変心配しましたが、同窓会の皆様の温かいご協力によりまして、就職希望者全員（10名）が内定しました。一方、大学院進学希望者は17名に達し、この大半が本学応用化学専攻を受験したため、これまた大変な難関となりました。現時点で本学へ6名、他大学院2名が合格、残りの約8名は次の大学院入試を目指して受験勉強に励んで（？）います。

最後に教員の動向ですが、この1年間人事の異動はなく、11名全員それぞれの分野で活躍されていますが、詳細は割愛させていただきます。

同窓会の皆様のご活躍と益々のご発展を祈念するとともに、なお一層のご支援をお願いいたし、近況報告いたします。

(生物応用化学科主任教授)



## 思い出

三谷 七郎



私の市大との係わりは、旧制阪大理学部物理学科4回生の卒業研究を渡瀬研究室をお願いした事に始まります。高倉達雄先生の指導で、扇町の理工学部学舎の東南角の4階に張り出した、「パラボラアンテナによる太陽電波の観測」に携わり、～200MHzの導波管や真空管増幅器の製作をしました。この事が、物理的研究より観測機器の製作に進む出発点となったように思います。

次いで、大学院の3年半は、乗鞍の市大の宇宙線観測所並びに東大原子核研究所の観測所に於て、『ウイルソン霧箱による陽子核反応の研究』に菅浩一先生の指導の下で、田中靖郎君と共に参加しました。二人が乗鞍にあって、8時間交替で連続観測のお守りをすると言うハードスケジュールで、昼間の休息時間は山登りやスキーを楽しむので、1日置きに8時間の睡眠をとる事も度々でした。無免許で無断でローバーを運転して、平地に近い場所で幸だったのですが、横転事故を起こして、始末書を書かされるような若気の到りでの無謀な振舞の多い時期でした。又、車が通れなくなってからの交替で、初めての冬道を、カンジキを履いて腰まで埋まる雪道を一人で在所まで下ったときには、人の姿を見た途端に安心して足の力が抜けてへたり込んでしまった事も忘れられない思い出です。無事だったのは、北海道の雪国で育った経験と、方向感覚が優れている（自賛）せいだと思います。

昭和31年10月に市大に就職して焼津の地下宇宙線観測に従事し、小塩高文先生始め多くの先生の指導を色々な面で頂くことになりました。物理的な面よりも大形ウイルソン霧箱のメンテナンスや観測装置の改良などの方に興味がありました。観測イベントの頻度は少なく、連続観測でも1人の常駐が普通で、茶畑に登ったり、大崩れ海岸をスクーターで走ったりで暇を潰して過ごしました。渡辺建二先生と滞在中に、輸送用ダンボールに入れたまま使用していた放電管光源用のコンデンサーが発火する事故が発生しました。まず、コンデンサーのチャージを放電してから消火を行い、感電などの事故も無く、発火したコンデンサー以外に被害が無く観測を続ける事が出来ました。

原子力基礎研究所に移って『シンチレーターの開発研究』で化学薬品を扱うことになって、化学が嫌いで物理学科を選んだのにと、運命の悪戯を怨んだものです。

原子力基礎研究所へ移動後の大学紛争時は研究ストップで、真空管からトランジスターへの頭の切り替えと、TTL集積回路の勉強する時間を稼ぐことが出来ました。

昭和46年に小塩先生の勧めで、佐々木泰三先生（東大教養）が進めておられた原子核研究所の蓄積型電子加速器（現東大物性研SOR-RING）の高周波加速系の建設に、先に参加していた石黒英治君を助ける形で加わるようになりました。未経験の～100MHzで10kWの発振器と共振空洞の製作を、昭和49年の文部省科学研究費に申請して、満額交付され、1年位の調整期間を経て完成させました。石黒君と共に5週間位調整に毎週通ったものです。定常運転に入ってから、研究所に行く度に、殆ど毎回、高周波加速系のどこかが故障で、担当の三国技官（現高エネルギー研部長）が修理している場面に会い、装置が私に甘えてたさを捏ねているように感じた程です。私の担当ではありませんが、偏向電磁石の電源が不安定で磁場が定常にならず困っていたので、安定電源の電流検出用抵抗のターミナルの温度上昇による熱起電力による事を指摘し、温度安定化対策を講じて、所期の性能達成に寄与出来ました。

この建設に参加した当時大学院生だったメンバーは現在各所の放射光施設の重要な地位にいて活躍しています。

昭和54年に『真空紫外域用回折格子の効率測定装置の開発と製作』を何の準備もなしに、小塩先生に任せられ、この分野の研究に足を踏み入れる事になりました。真空容器内での測定機構の制御、測定データの処理等のソフトの改良に務め、漸く思い通りに働くようになったところで定年を迎えることになりましたが、この仕事が元で、高エネルギー物理学研究所の放射光実験施設、核融合研究所や分子科学研究所等の軟X線、真空紫外域の分光システムの開発に参画させて貰う事が出来ました。

市大に出入りするようになって41年、就職してから36年半、何時も初めての分野のテーマを与えられて何とかやって来られたのは、性分に合ったエレクトロ・メカニカルな仕事が多かったからだと思います。ご指導・ご協力・励ましを戴いた諸先生、諸先輩、多くの研究者の方々に心から感謝致します。最後になりましたが、5年間の短い期間でしたがお世話になりました工学部の先生、職員の方々に厚く御礼申し上げます。

（元電気工学科助教授）

## 山陰地方のこと

柏田 幸男



卒業して早40年、齢も還暦をすぎること3年となり仕事の面でも、体の上にもいろいろな変化が見られる今日この頃です。会報第11号を発行されるとのことで投稿させていただきます。

私は鳥取大学に勤務して今年10月で満27年になります。ご存じのように鳥取県は全国で最も人口の少ない小さな県で、鳥取大学自身も規模の大きい大学ではありませんが、昭和24年の大学創設当時から医学部を擁し教育学部、農学部そして工学部の4学部からなる総合大学です。工学部は昭和40年の設置です。このような鳥取県内にはさしたる大きな企業もなく、従って鳥取大学工学部卒業生は勿論のこと他大学の工学部出身者の活躍の場も少なく、大阪市立大学工学部出身者はほんの少人数が活躍している程度です。

しかしながら、何らかの同窓会活動によって在県市大工学部卒業生間の各職場における情報交換、コミュニケーションの場を持てるように、努力をしていますが、工学部出身者だけで活動するにはあまりにも小規模で、運営等が困難です。このことは他の学部出身者でも同じことですので、現在旧大阪商科大学出身者をも含めた全大阪市立大学の同窓会の形で、しかも地域を山陰の鳥取、島根の両県として、年に一度地域で回り持ちで世話をして同窓会を開催してきました。一昨年には前崎山学長に出雲市までご米駕頂き一泊の日程で有意義な時を過ごしました。

毎回30～40名程度の参加がありますが、鳥取、島根はそれぞれ東西に細長い県で、約400kmあり、しかも交通の便の悪いところで集まりますのもなかなか大変なことです。それで、今年からは山陰全体の集まりは隔年とし、その間の年には鳥取、島根の両県でそれぞれ会合を持つ運営に改正しました。より一層の発展のための改正であることを期待しています。

6、7年前からこの全市大の山陰地区での同窓会の会長を務めさせて頂いていますので、山陰地方の現状をお知らせするため投稿させていただきましたが、市大を卒業して40年、同窓会の会長を務めなければならない年齢に今更ながら思いを新たにしている今日この頃です。

（機械 昭和28年卒 鳥取大学工学部機械工学科）

## 同窓会のあり方雑感

駒 日出男



建築学科同窓会（大阪市立大学建築会）が誕生したのは、第一期生が卒業して間もない、昭和30年頃のごとです。同36年には会則も制定し、同62年には旧都島工専との合併も実現して、今日に至っています。

建築会の古い歴史に負うてか、私たちの内に、建築会こそ唯一の同窓会であるという思いや、ひいては、工学部同窓会に関心の薄い傾向があるのを、望ましくないかどうかは別問題として、全く否定するわけにもいきません。比較的新しい卒業生は、事情がやや異なりますが、古い新製の卒業生には、そのような向きが多いようです。

ともあれ、私たちは、工学部同窓会に協力しない立場を採るものではありません。実は、先の工学部創立40周年記念事業の募金に際しては、多少困った問題に直面しました。建築会は折節、会員の出費による行事をしていますが、偶々その当時は、建築会の大切な行事が重なっていた矢先でした。同窓会のある建築は募金もスムーズであろう、と期待されたかも知れません。でも私たちは、あまりご期待に添えなかった原因を、建築会が現に活動しているが故である、と考えざるを得なかったのです。

学科によっては同窓会組織がないということを知ったのは、この40周年記念事業の際のことです。私は、建築会の存在と状態から推して、全ての学科に各々の同窓会があるものと、漠然と思い込んでいたのです。

建築会があるという事実と根差して、私たちは、工学部同窓会の構成単位は卒業生個人ではなく、各学科の同窓会である、と考えています。現状では、何となく二つの同窓会が重複してあるような印象が拭いきれません。また、図らずも、対立的な状況が生じているかのような状態があることは嬉しくないもので、親しく相談することによって、適切な処理が計られることが望まれます。

大筋において、工学部同窓会と学科同窓会の関係は、少しばかり整理整頓しておくのが好ましいかも知れません。有恒会についても、幾分そのようです。学部単位の話は兎も角、工学部卒業生に対して、昨今は個々に有恒会入会の勧誘があるようです。会そのものの特質や、複数ある会の相互の関係もよく分からない状態で、何となく「どの会にも入らなければならないのかな」というのは、卒業生が困惑しそうに思われます。ご苦勞ながら、会を運営する立場にある方々の、賢明なリードが期待される所でありましょうか。

（建築、昭和32年卒、(株)駒建築設計事務所）

## 「人生4万日」

杉本 正



卒業研究で学んだPCMの技術が通信やCDの録音などの分野で実用化され、いま開花している。

会社入社当時は一部屋を要していた「電算機」が、鞆やポケットに入るようになり、個人でも買えるまでになった。

卒業後30年余、高度成長の波に乗って世の中は大きく変貌を遂げた。幸いにして、この間不況知らずであったコンピュータ事業に身を置いて、開発設計～製造検査、管理部門へ、近くなった川崎一明石間を工場から工場へと往復し、あつという間の30年であった。

数年前、某大学の学長に「人生4万日」というお話を伺った。1万日は27年。いま百才以上の人も多くおられるから、4万日は目標としては妥当か。生後1万日は人生の基礎づくり、次の1万日が活躍期、次が円熟期で生涯の一番充実した時期だというお話である。以来、これを引用して新入社員に、いま生涯の基礎づくりの「仕上げ」の時期だから、心身をよく鍛えておきなさいと話した。

いま、自身を振り返って見て「円熟期」への感慨などかけらもない。折しも、不況で身に摘まされることの多い昨今である。 （電気・昭和35年卒・富士通株）

## 最初の地下鉄

近藤 哲也



現在、世界各地の主要な都市で、地下鉄は重要な都市交通機関のひとつになっています。日本国内でも10都市で、地下鉄が建設されています。

地下鉄トンネルの計画・設計業務に従事して30年、いろいろなことを見聞しました。

最初の地下鉄が走った都市はロンドンで、今から130年前の1863年、日本でいえば江戸末期文久3年のことでした。蒸気機関車で客車を引いた地下鉄には、徳川幕府のサムライたちも乗っています。慶応元年第15代将軍の弟である徳川昭武を代表とした使節団が、出来たばかりの地下鉄に乗りました。地下鉄が電気の力で最初に走ったのは、やはりロンドンで、1890年（明治23年）のことです。これには、夏目漱石も乗っております。



ニューヨークの地下鉄が開業したのは、1904年（明治37年）のことでした。「地下鉄サム」の物語は、天才肌のスリであるサムが、ニューヨークの中心であるマンハッタンで、地下鉄を仕事場に活躍する小説です。

地下鉄のことを知りたい方は、東京の地下鉄博物館（営団東西線葛西駅）に行かれたらと思います。

（土木・昭和35年卒・中央復建コンサルタンツ(株)東京支社）

## 「私の近況」

原田 洋



南扇町の箕浦研を巣立って27年になる。当時はすでに工学部が杉本町に移転し、多くは空屋のボロ校舎の中で箕浦先生以下30名近くの人達が本当に自由な雰囲気の中で、研究生活を送っていた。（箕浦先生は外部の仕事も多くよく留守にされ、椎名先生は米国留学中であつた。）今さらながら当時のことが懐かしく思い出される。先日、同級であつた現市大玉垣先生より、お前の動向はよく分からないので近況でも書くよう指名を受けた。すっかりご無沙汰していることに恐縮している。さてその近況であるが、当節のご多分にもれず3年近く単身赴任の身にあり、変貌著しい横浜の町中と赴任先の九州の片田舎延岡とを行ったり来たりしている。山、川、海……と豊富な自然、田圃道の徒歩通勤、近くて、安くて、手軽な飲屋、ゴルフ等々ゆとりある生活は地方に軍配ありと感じつつ、しばらくすると都会も恋しくなる。仕事の方は合成ゴム、PEアイオノマー、変性PPEそしてナイロンとほぼ一貫してポリマー材料の開発屋を続けてきた。長いという実感はないがプラスチック材料の進展を4世紀見つけしてきたことになる。現在は例のカラーガスの発見以来60年にもなるナイロン66樹脂を金属に取って代る「もっと大型構造材向けの材料に」との考えで開発に取り組んでいる。ところで最近、個人としても組織としても、どうすればもっと開発効率の良い仕事ができるのか、その決め手は何かといったことを考えることしきりである。確かに分析機器、測定機、コンピューター、加工機器といった開発道具類の進歩は正に隔世の感があり、我々の世界でも先端の分析、解析力が勝負を決めると実感しつつ、根本の思考態度、行動は20年前とさほど進歩していないのが実感である。この辺りが、自身、会社やめても「これでメシが食えます」といったものが身についていないことにもなるのかと反省する次第である。

（応化、昭和41年前博修了、旭化成工業(株)）

## 「社会人20年生にして思うこと」

川本 清



第一次オイルショックの年に就職し社会人として約20年間泳いできたこととなる。この間、第2次オイルショック（1980年）、円高不況（1985年）に揉まれ、今、平成不況（1991年）という超大型で非常に強い台風を経験している。

円高不況までは日本全体が一丸となり不況対策を実施することで景気を回復することができた。ところが近年我々の職場環境をめぐる情勢は「人手不足」、そして「時短」が叫ばれ、ついに最近では「リストラ」の名のもと我々中間管理職も含めた人員削減が行われる等、これまでの不況とは違った様相を示している。つまり、1973年からのオイルショック以来、日米欧の先進諸国では石油文明の成熟期に入っており知恵の手詰まりの時代を迎えていると言われている。最近、世の中で「進歩」とか「発展」と言った言葉が聞かれなくなっており昨年のセビリア万博のテーマも「発見の時代」とされた。それはコロンブスの新大陸発見500年を記念するだけでなく、これからの生きる知恵を外国や過去から発見し新しい未来を切り開こうという意味が込められていた。戦後、我が国においても石油技術文明のもと一貫して経済の成長を目指し「機能性」「経済性」「効率性」を追求する仕組みを造りあげ発展を遂げてきた。これまでの不況ではこの仕組みに一部修正を加えることで景気を回復する事ができた。しかし、昨今の社会・経済状況は、このような成長発展を可能と成らしめる仕組みの効力が消滅しさらに「石油」に代わる画期的な「発見」もなされず、またその可能性も望み薄であり先行きが不透明であることに起因していると思われる。

この様な時代に生きる我々に求められていることは、行き詰まった時代を切り開く新しい「発見」を生み出す仕組み（社会・経済）を造り出す事ではないだろうか。今、小生は関西国際空港の建設に従事しているが関空の全体構想の実現についても新しい知恵を出し合う事が求められている。市大の卒業生の方々も民間企業、官公庁、大学等あらゆる分野で活躍されているが、広く皆様方と交流し知恵を出し合い新しい時代の幕開けに少しでも貢献できればと考えている。

（土木・昭和49年前博修了 関西国際空港(株)）

## 物づくりに未来はあるか

宜川 克



「君、ドイツに行くか。」「はあ？」「フンボルトや」何ですかそれ。工学部D棟2階、反応工学研究室での何気ない会話であった。昭和49年春、博士課程在籍中で、毎日高圧実験に明け暮れていた私に、小郷良明先生が投げかけた一言が私の人生(?)を変えた。

戦前のドイツで人造石油のパイオニアであったベルグウスの流れをくむ工科大学研究室への留学が実現したのは、その3年後、古き良きドイツの技術の一端を楽しく体験させていただいた。

10数年経った今春、新しく発足した市大客員制度で、工科大学の恩師のプロフェッサーを数週間、杉本町に迎えていただいた。院生向けの講義では新興の韓国化学コンビナートの躍進に苦慮する独大手化学メーカーの話が印象的であった。10数年前、1マルク100円のレートが今や60円、日本を含め日の出の勢いのアジア勢に、西欧近代経済体制の衰退に、又価値感の変革に、戸惑う教授の姿がここにあった。「昔は良かった」が言葉でない言葉であった気がする。時代は確実に変わっている。物価は20年前に戻るデフレの時代。株価は来年で1万円を割りドルは80~90円が予想される時、新しい価値感をどう見つけるか。「物づくり」の次には何が価値感の基盤になるのか。物づくりを学んだ元エンジニアの卵の戸惑いはつきない。歴史的に見れば超赤字会社になった米国の後を継いで、円の基軸通貨化による「日本の時代」が今後数十年続くことは確実なのだが……。

(応化45年卒 船井総合研究所)

## 思うこと

穴吹 隆



今年の2月に東北支店(仙台)に転勤して以来、世の中が内外ともに騒がしくなっている。また、気象、天候も噴火、地震、冷夏、台風、洪水等、地球がおかしくなっている。振り返れば入学した昭和48年は、半年間授業がなかつたし、卒業の年はオイルショックで就職難であったし、

団塊の世代はどうしてこうも巡り合わせが悪いのかと痛感する。卒業して20年、体重は20キロ着実に増えたが、

半面、脳細胞はかなり壊れてきている。何故か文章にすると、「暗い」内容になってしまう。現在、精神衛生上良くない状態にあるのだろうか?オートキャンプは楽しかったが、大雨でタープが倒れ、殆ど徹夜したし、プールで子供と本気で競争して、酸欠状態でふらふらになるし、十分中年になったなど実感する。良い事と言えば、仙台にきて「酒、魚、米」がおいしい事と、東京の気遣いじみたラッシュから解放された事くらいしか思いつかない。話は飛ぶが、これから先の時代を如何に読むか、又、その為に何をなすべきか。「自分の生き方、将来の事を真剣に考え直さなければいけない」等と思いつつ、おいしい酒を飲む今日この頃である。

(電気昭和48年卒 清水建設(株)東北支店)

## 「男の顔」

田辺 利住



市大に残って教鞭をとっている大嶋寛君から「何か書いてくれ」と電話があった。「まかしとけ」と安請け合したものの、いざ原稿用紙を前にすると固苦しい文章しか浮んでこない。書いたものを妻に見せても「難しい事ばかり書いて、何を言いたいのかわからない」と言われる始末で自己の文才のなさを痛感している。考えて見れば昭和49年に学部を卒業し、大学院、会社の研究所と、ものを書くと言えば学会の発表原稿か、投稿論文ばかり、科学的な事を少しばかり平易に書く事はできるものの、この様な小文をお洒落に飾る事など所詮無理なのかもしれない。

大体、会社の研究所などに勤務していると営業などと違って、限られた同質の人間としか接触せず話題も限られている。研究所では結構外交的に調子良くやっているのだが、外に出るとうまくいかない。町内会の集いでも話す事がなく、強張った顔をして饅頭をかじっている次第である。社内の同期の人間を見ても、他人との接触の多い営業等の人間に比べ、研究所に暮す人間の顔は概して若い。いつまでもヒトに揉まれぬ青臭い表情をしている。研究者はオモチャで遊んでいる子供の様なところがあるので、そうなるのかも知れない。そんな仕事を生業にしていられる幸福を感じると共に、そろそろ自分も男の顔を持たねばならぬと考えている昨今である。

(昭和49年(株)ミドリ十字中央研究所)

## 「スペインより」

田那村俊也

日本から見たスペインの印象は、闘牛、フラメンコ、情熱の国、最近ではゴルフのバレストロスを思い出される方も多いと思います。しかし、スペインがG7に次ぐ世界第8位のGDPをほこり、3つの公用語を有する多民族国家だとはあまり知られていません。EC加盟以来、スペインはEC内の生産拠点として世界からの投資が殺到し、「スペインの奇跡」とまでいわれた発展を遂げました。ご存じのように1992年にはバルセロナ五輪、セビリア万博が開かれ、世界中でスペインブームが起こりました。私が赴任した1991年はスペイン経済の絶頂点で、土地、物価、通貨が急騰し、まさにバブルが一番膨らんだ時と言えます。しかしオリンピックごろからスペインでもバブルが崩壊し始め、世界的不況の影響も受け、今年には戦後最悪の不況と言われています。ただスペイン通貨（ペセタ）も急落したため、スペイン最大の産業である観光産業だけは難を逃れているようです。ここで、スペインでの生活について、いくつかご紹介したいと思います。私の住んでいるマドリッドは大阪同様、物価は高く、住宅事情も決してよくありません。しかし、食料品・酒類に関しては、非常に安く、しかも種類が豊富で、まず不自由することは有りません。特に魚介類は日本以上に種類が豊富でしかも新鮮です。マドリッドは大阪以上に「食いだおれ」の町で、至る所にレストラン、居酒屋があり、しかも日本人好みの味付け（塩味が中心）になっています。ワインも三百円くらいで買え、ワイン通に言わせるとフランスワインよりも美味しいとのこと。食事に関し、日本人がなじめないのは食事の始まる時間で、昼食は2時ごろ、夕食は9時ごろからしかレストランが開きません。

次に交通事情をご紹介します。正直にいうとスペイン人の運転マナーは非常に悪く、評判の悪い大阪人でもスペインでは優良ドライバーになります。信号無視、無理な追越し・割り込み、二重駐車は日常茶飯事で、至る所で毎日のように事故が起こっています。ただ、人の車にぶつけても、少々の傷では両者ともあまり気にしないようで、「すまん」の一言で終わるようです。

## 私の今日この頃

八尾 博彦



(株)修成建設コンサルタントに入社して、15年余の歳月が思いのほか足早やに過ぎ去った感じがする今日この頃です。この間、道路及び橋梁の構造物設計及びその施工管理業務等を経験した後、7年目から港湾の計画及び構造物設計を担当するようになり、現在に至っております。在学中、クラブ活動（サッカー部）に熱中し勉学を疎かにしておりましたが、特に水理学を筆頭に水に関する専門分野の学習を怠ったことを今になって悔んでおります。

最近、豊かな生活大国を目指し、社会資本整備の充実が叫ばれる中、建設分野においてグローバルな環境問題への取組みが必要不可欠となってきています。私が担当している港湾整備計画の分野においても、従来実施されてきた機能性及び経済性の追求ばかりでなく、自然環境保護が重要なテーマとなっています。このように、我々土木技術者にも、専門分野以外の幅広い知識が要求されており、専門学科にとらわれることなく工学部全体の横のつながりをより一層深めていくことが非常に大切なことだと思っております。

(土木・昭和52年卒業・(株)修成建設コンサルタント)

最後に、一般的なスペイン人の特徴を、私なりに紹介します。スペイン人はたいへん親切でお人好しで、親日派が多いと思います。ただ、時間にルーズで、またそれを悪いとも思っていないようです。ビジネスでは「コネ」が最優先され、友達、親戚、同郷のよしみ、というのがあればうまくいきます。スペイン人は芸達者が多く、歌と踊りが得意で、最近人気の出だしたカラオケはどことも満員で、必ず歌に踊りが加わります。生活は家族中心で毎日を楽しくすごしています。現在スペインは不況のどん底にありますが、人々からはそういった感じをうけません。今の日本人はスペイン人を見習うときかもしれません。(機械・昭和59年卒・オムロンスペイン)

(南斎先生(左)とトレドにて。本年6月)



## 新鮮な目と心で

谷口与史也



諸先輩及び同窓会員の皆様には、お変わり無くお過ごしでしょうか。今年は冷夏と長雨、政界においても大きな変化がありました。私にとっても大きな変化の年となりました。それと言うのも、今年の4月から母校の教員として勤務することになったからです。卒業して11年目を迎えますが、

その内訳は、修士課程2年、企業での勤務歴5年、博士課程3年で、研究活動と実務活動の期間がちょうど同じです。そのおかげで、この10年間は常に新鮮な気持ちで過ごすことができ、軽いカルチャーショックを3度も経験できました。

実務では、鋼構造を研究していたということで、最初に製鉄工場の新築建屋を担当させられました。初めて敷地に足を踏み入れて、色々なことに驚きました。敷地内を貨車が走り、信号機や踏切があることや、車で移動しないとたどり着かないほどの敷地の広さなどです。そして、鉄の作り方を学ぶためには、まず高炉に登らなければならないと、最上部の屋根の上に連れていかれ、「梁のあるところ以外に足を掛けると、屋根折板が腐食しているから、足が抜け落ちるぞ。」と先輩に言われて、ただでさえ強い海風と恐怖のために緊張した足が前になかなか出ませんでした。工場竣工後、東京都内のインテリジェントビルなどの鉄骨構造の大型物件を担当しました。建築では珍しいフランジの肉厚が10cmもあるH形鋼や教科書でしか目にしたことのない構造物の各部位を実際に見ることができました。

しかし、そのような感動的なことも次第に少なくなります。そこで日常の業務の中で一番大事なことは、何事においてもマナーにならないように注意することだと思います。どんなに高度な業務をこなしても、ついうっかりということは必ずあると思います。工事現場では、この「うっかり」は重大災害につながることもあります。もう一つ感じたことは、実務作業では時間の節約や経験則が重んじられる余り、高度な設計・施工技術の隠れた部分で、意外にも本質的な研究がなされていないことが多いことです。これは、建設業そのものが現場生産を大前提としていることと無関係では無いでしょう。研究の実務への拡張、あるいは実務作業の研究内容へのフィードバックができる立場となった今、これからも新鮮な目と心を忘れること無く、母校に少しでも貢献できるように頑張りたいと思います。

(建築・昭和58年卒・大阪市立大学工学部)

## 近況報告

三原 里香



卒業して、富士通株式会社に入社してから8年半が過ぎた。現在フィールド担当のシステムエンジニア（以下フィールドSE）として、家電メーカーや機械メーカーの設計部門を主に担当している。

フィールドSEは各顧客の要件を把握した上で富士通のコンピュータとソフトウェアを提案する。コンピュータはソフトがなければ『ただの箱』と言われるが、必要なソフトウェアを『ただの箱』の中に収めるのも仕事の一つである。場合によってはそのソフトウェアを開発する。顧客にコンピュータの使い方を教える。私もフィールドSEの一員として最近ではある機械メーカーに設計支援システムの提案を行ったりしていた。

入社してから今までずっと忙しく働き続けてきたが、結婚して五年経った今は、近い将来において妊娠、出産育児を経験したいと考えるようになった。

しかし、このままではとても育児はできない。というのは、今の仕事は残業などの時間外勤務が多く、仕事をこなすだけでも保育所の送り迎えさえできない。だからといって、育児に専念して職業人としての自分の可能性を断つことも耐えがたい。一時仕事を中断し、復帰することも考えてみた。しかし、今のような不況では大卒女子学生の就職も厳しいのに、子持ちの女性の再雇用は不可能だろう。ならば、育児をしながらも、今の正社員の地位にしがみついて、そこで少しでも居心地の良い場所を築きあげるしかない。

最近、社内で仕事と育児を両立させる女性も増えてきている。保育所のお迎えの時間に追われながらも、それまでに培ってきた技術を活かして会社に貢献している。皆、各々の家庭の制約を受けつつも、周りの理解を得ることにより、仕事を調整し今の立場を手に入れてきたのだ。私も後に続くつもりでいる。

今から8年以上も前、私が就職する時、民間企業で働き続けることの厳しさを周囲の人々に指摘された。その時はまだその厳しさがどのようなことかわからなくて、「できるところまでとにかく働き続けてみよう。」と思った。私は今も同じ気持ちだ。いつになったら手探り状態から抜け出せるのだろうか。

(応物・昭和60年卒・富士通株)

## 近 況

西山 哲弘



私は高校生の頃から情報処理に興味があったため、4回生の時は情報工学研究室を選択し、そこで過ごすことのできた1年間は今から思えば非常に充実した時期でした。

その後、現在私が勤めている南海電鉄に入社したわけですが、学生時代の研究とは全く関係のない、主に変電所、電線路、電灯及び空調の保守工事を行っている電気課に配属され、昨年まで変電所の新設等主に変電関係の業務を担当してきました。そして今年に入り変電関係から設備関係の業務に担当が変わり、現在は当社が関西国際空港開港に向けて施工している難波駅改造工事のうちの電気・空調設備工事を担当しています。

このように、入社以来様々な工事を担当してきましたわけですが、それら1つ1つを経験していくうちにこれまでもっていた「自分1人でやればよい」という考えの限界を痛感し、最近では自分の周囲にいるその方面のプロの力をいかに効率的に活用していくかを考えるようになってきました。そして、これからはそれらの力を吸収しながら自分のフィールドも広げるように努力していきたいと考えています。

(電気・昭和62年卒・南海電気鉄道(株))

## 市大同窓会愛知支部だより

山田 正博



大阪市立大学同窓会愛知支部として、全学部的に活動を続けております。東海3県(愛知・岐阜・三重)で活躍中の同窓生によって構成され、懇親会を兼ねた総会を年1回11月頃開催しています。

昨年は会員約900名に呼びかけ、大正11年本科卒業の箕輪吉人氏から新卒者まで総勢100名の出席を得て、11月19日に総会を開きました。山本研二郎学長、崎山耕作前学長に御臨席いただき、建築学科で長く教鞭をとられた日置興一郎先生にも久し振りにお会いすることができました。なお工学部卒業の出席者は17名でした。

宮川茂夫支部長(昭24学部卒)はじめ、各学部からの幹事20名程により、今年も第7回総会を11月24日に名古屋の名鉄ニューグランドホテルにおいて開催すべく、原稿を書いている只今準備を進めております。

現在約950名の方は、名簿等により連絡は可能ですが、より多くの方に呼びかけたいと思います。東海地方に勤

務又は在住されてる同窓生の中で、今だにご案内の届いてない方は、下記まで御一報下さい。次回より総会のご案内を郵送させていただきます。

(建築・昭和46年卒・(有)建築計画工房)

## 入社後5年

寺井 由佳



現在、私は、松下電器産業(株)の半導体研究センターという所に勤務しております。担当は超LSIのプロセス開発です。

5年前、新人として職場に配属され、まず、行った仕事は、クリーンルーム内にあるCVD(化学気相反応)装置を担当することと、新しいCVD装置を立ち上げることでした。最初、このような半導体製造装置が数億円するというのを聞いて驚きました。こんな高価な装置を担当させてもらって、有難いというか、いいんかいなーという感じでした。数ヶ月して、晴海のセミコンショールを見るために出張に行った時には、人の多さに動きが取れない有様で、圧倒されました。パソコンなどに入っているこんな小さな部品のために、これほど巨額の費用と大量の人が注ぎ込まれる半導体業界を目にして、「すごいところに入ってしまった。」という印象を受けたことを覚えています。

5年経ち、最近、この業界は、やはり、投資が巨額になりすぎるため、大きな転換期にあるようです。ローコストプロセスというの、1つの目玉になっています。

私とは言えば、たいして変わりばえしない毎日です。B型の、のんきさゆえか、自分なりにやればいいやと思っています。(体もそんなに頑丈で、屈強というには、程遠いし。)

昔は野放しに近かったのに、最近、よく上の人に怒られますが、内容といえば、「技術のオリジナリテがどこにあるのか」、とか、「自分の判断はどうか、今後どのようにしたいのかわからない」、「いつまでに何をアウトプットするのか、全体にどう貢献できるのか見えない」、「説明がわからない」等々です。(うーむ。どうすればいいのかわからんわ。)勉強不足のため、世の中わからないことだらけで厭になってしまいますが、10年後には、「この技術には自信があんねん。」と言える技術者にGAMBAってなりたいと思います。

余談ですが、私にこの欄のお鉢が回ってきたのには、当時、工学部には、女の人が少なかったということにも起因するでしょうけど、今も昔も特に思うことはないです。(会社に入ってから、学生の頃みたいにはいかないけど、まあまあ何とかしたるわい程度です。)

(応物・昭和63年卒・松下電器産業(株))

事 務 局 年 報

( '92・12～'93・11)

'92年12月…同窓会報第10号を発送(10日)。

'93年1月…第10期第4回理事会を市大文化交流センターにて開催し、第8回評議員会の議案書および懇親パーティ1993の次第等を決定(14日)。第8回評議員会を新阪急ビルスカイルーム(北区梅田1丁目新阪急ビル12階)にて開催し、下記の(1)～(4)の議案を承認・決定。同時に、宮尾信昭氏(機械・昭和23年卒)の藍綬褒章受章記念講演会および同窓懇親パーティ1993を併催(29日)。

- (1) 第10期('91・1～'92・12)収支決算報告
- (4) 経常費収支決算表(円)

収 入		支 出	
終身会費	10,060,000	第8回評議員会	233,190
預金利息	267,906	7号名簿発行費	7,668,402
7号名簿代	5,120,500	10号会報発行費	1,109,233
協賛広告料	2,305,000	事務局費	3,592,820
		大学行事協力費	732,190
		特別基金積立	1,060,358
		次期繰越金	3,387,213
合 計	17,783,406	合 計	17,783,406

(4) 貸借対照表('92年12月末現在、単位：円)

借 方		貸 方	
振替口座	99,874	'90年度累計剰余金	3,671,892
普通預金	499,231	第10期剰余金	3,387,213
定期預金	32,886,783	特別基金	41,842,505
有価証券	15,415,722		
合 計	48,901,610	合 計	48,901,610

(2) 第11期理事会役員改選

- |     |            |     |             |
|-----|------------|-----|-------------|
| 会 長 | 下田 隆二(機29) | 副 長 | 晃(機26)      |
| 副会長 | 植木 正富(土24) |     | 南齋 征夫(機39)  |
| 理 事 | 大月 正雄(機24) |     | 高橋 慧(電31)   |
|     | 人見 宗男(機31) |     | 南 繁行(電45)   |
|     | 東 恒雄(機41)  |     | 高橋 慧(電31)   |
|     | 中島 弘(電25)  |     | 南 繁行(電45)   |
|     | 建部 涉(電35)  |     | 山田文一郎(化修40) |
|     | 串坂 徹(電55)  |     | 大嶋 寛(化49)   |
|     | 滝内 峻(化33)  |     |             |
|     | 三浦 洋三(化42) |     |             |
|     | 石崎 省吾(化55) |     |             |
|     | 坂内 幾男(建24) |     |             |
|     | 多胡 進(建34)  |     |             |
|     | 井上 保(土26)  |     |             |
|     | 小林 治俊(土45) |     |             |
|     | 大島 昭彦(土55) |     |             |

- 理 事 北田 忠義(物36) 田守 芳勝(物38)
- 石黒 英治(物40) 茶谷 修治(物50)
- 芹澤 進(物55)

監 事 保坂 博通(物34)

- (3) 第11期事業計画
- (4) 同窓会報第11号('93)、第12号('94)の発行。
- (ロ) 工学部および全学的行事への協力
- (ハ) 特別基金の積立継続。
- (二) 同窓懇親パーティの開催。
- (ホ) セミナールまたは講演会の開催。
- (4) 第11期経常費予算(万円)

収 入		支 出	
終身会費	800	第9回評議員会	20
利 息	15	懇親パーティ	15
雑 収 入	2	セミナール	10
		事務局費	430
		大学行事協力費	60
		会報11, 12号発行費	235
		特別基金積立	380
		収 支 差 額	△ 333
合 計	817	合 計	817

2月…市大広報19号を理事・評議員へ送付(5日)

3月…'93年度合格者へ当会資材・会費払込み要請書を配布(13日、26日)。工学部送別式・鏡割りに下田会長・植木副会長他学内理事有志が出席(24日)

4月…内海達雄(土木旧教員)先生が14日に、東野一郎名誉教授(機械)が17日にご逝去。

5月…市大広報20号を学外理事・評議員へ送付(1日)。当期の特別基金積立(27日)。

6月…法学部新学舎完成記念式典へ下田会長が出席(5日)。終身会費の督促状を発送(8日)。

9月…同窓会報の編集委員会を開催(6日)。

10月…市大広報21号を学外理事等へ発送(2日)。

11月…会報第11号の印刷発注(2日)。校正完了(30日)。

◎住所・勤務先の変更は、かならず事務局へご連絡下さい!!

◎未納終身会費は、すみやかに払い込み下さい!!

工学部の電話番号〔06-605-(下記番号)〕(1993. 10. 1. 現在)

機械工学科	電気工学科	応用化学科	建築学科	土木工学科	応用物理学科
福田 武人 2660	鈴木 裕 2676	小槻 勉 2693	川村 純夫 2706	園田恵一郎 2722	美馬 宏司 2742
元木 信弥 2661	南 繁行 2760	澤井圭二郎 2694	木内 龍彦 2707	小林 治俊 2723	曾我部 伸 2740
逢坂 勝彦 2661	黒田 輝 2677	五百井正樹 2694	谷口 徹郎 2707	鬼頭 宏明 2723	藤井 康夫 2738
野邑 奉弘 2663	志水 英二 2678	園頭 健吉 2884	坂 壽二 2708	高田 直俊 2724	西村 仁 2739
西村 伸也 2664	重田 和夫 2671	鬼塚 清孝 2885	藤本 益美 2709	望月 秋利 2726	石黒 英治 2744
東 恒雄 2666	高橋 秀也 2679	青木 修三 2697	那谷晴一郎 2709	東田 淳 2725	中山 正昭 2739
加藤 健司 2665	青笹 正夫 2680	山田文一郎 2698	谷口与史也 2709	大島 昭彦 2725	北田 忠義 2745
脇本 辰郎 2665	前川 義治 2763	園藤紀代司 2698	成瀬 哲生 2710	山田 優 2727	森 雄造 2743
深澤 征夫 2667	草開 稔 2681	松本 章一 2698	西岡 利晃 2711	真嶋 光保 2729	笹沼 道雄 2744
南井 完祐 2668	田中 健司 2681	小郷 良明 2770	新居 洋子 2711	貫上 佳則 2728	人見 宗男 2745
吉岡 真弥 2668	松下 賢二 2792	矢野 元威 2771	大倉 良司 2711	西村 昂 2730	橋本 秀樹 2741
上神謙次郎 2662	中川 吉郎 2878	三浦 洋三 2771	多胡 進 2712	日野 泰雄 2731	勝俣 五男 2879
若林三記夫 2670	藤井 知生 2685		福田 晴彦 2714	岡村 治子 2731	増岡 俊夫 2880
森元 時夫 2670	建部 涉 2687		杉山 茂一 2713	小田 一紀 2732	三村三木夫 2879
守田 栄之 2671	山田正一郎 2686		徳尾野 徹 2713	角野 昇八 2733	中村 勝弘 2768
秋山 貞夫 2672			土井 幸平 2715	重松 孝昌 2733	小川 哲生 2748
瀧山 武 2672			濱田 学昭 2716	中井 博 2734	串部 宏之 2747
中山 守 2673			赤崎 弘平 2717	北田 俊行 2735	高根 美武 2748
			三木 信博 2718	中西 克佳 2735	緒方 司郎 2791
			田中 康夫 2718		北浦 信行 2791
			南 宏和 2790		
			奥田 泰雄 2790		

情報工学科	生物応用化学科	事務室等
浜 裕光 2772	仲矢 忠雄 2782	教 務 係 2653
中島 重義 2773	笠井 佐夫 2783	庶 務 係 2651
細川 省一 2683	北村 昌也 2783	図 書 分 室 2657
岡本 次郎 2684	加藤 錠治 2699	守 衛 室 2096
奥本 隆昭 2688	大嶋 寛 2700	
辰巳 昭治 2777	岡本 裕行 2700	
北村 泰彦 3081	太垣和一郎 2695	
藤原直賀人 2689	玉垣 誠三 2696	
岡 育生 2779	荻野 健治 2696	
	木下 雅悦 2702	
	山内 清 2703	

評議員の新任・交代

新任評議員(平成5年卒)および交代評議員は以下の通りです。クラスメートの各位はよろしくご協力下さい。

学 科	平成5年卒	交 代
機械工学	木村 裕二 辻 孝誠	東 麻生(昭和29年卒)
電気工学	岩永慎一郎 田中 信行	
応用化学	小西 孝昇 田口 清	
建 築 学	高橋 淳子 東本 光尚	久保 誉(平成3年卒)
土木工学	浜田 武 中村 忠善	矢野 幸子(昭和63年卒) 江口 勝彦(平成元年卒)
応用物理	小酒 英則 細川 和伸	

編集後記

戦後最悪の稲作に落込む程不順な天候に見舞われた'93年(平成5年)も師走となり、会員の皆様も一段と忙しさが増す頃だと思います。

さて、本号の挨拶は下田隆二新会長によるものです。本年1月29日の第8回評議員会以降、過去4年間当会のために種々ご尽力下さった繁沢孝前会長の後任を勤めていただいております。

工学部および8学科の昨年11月以降のホット情報を、木下工学部長および学科主任の先生方にご報告いただきました。なお、本年3月末には、機械および電気両学科で3人の先生が定年で退職になりましたが、残念ながら三谷七郎(電気)先生のご寄稿しか戴けませんでした。

また、会員通信の復活には、16名(機械・応物各2名、電気・応化・建築・土木各3名)の正会員がご協力下さいました。

ところで、産業界では様々な人員削減の嵐が吹き荒れておりますが、中間管理職などのホワイト・カラーがその矢面に立たされているとか。厳しい情勢になりましたが、万一の逆境にはめげることなく頑張るしかないですね。

編集委員

南斎征夫(機39) 建部 涉(電35) 大嶋 寛(化49)  
赤崎弘平(建45) 小林治俊(土45) 北田忠義(物36)  
人見宗男(機31)